

ダヤック人 (下)

Tr. by FUKAMI Sumio,
“DAJAKS”, *Encyclopaedie van Nederlandsch-Indië* (II)

深 見 純 生 訳

キーワード：ダヤック人，ボルネオ，カリマンタン，マレー人，プナン族

訳者序言

本稿の原著者は項目末尾にT.J.B.と記される。巻頭の執筆者一覧に照らすとベーゼメルT.J.Bezemerと推定できる。おなじ百科事典の第2～4巻と補遺第1巻（通巻第5巻，1927年）および補遺巻4巻（通巻第8巻，1939年）の執筆者一覧にもベーゼメルの名前があるが，どの項目の筆者なのか不明である（調べるのはかなり手間がかかる）。職業はこれら執筆者一覧によればワーヘニンヘン農科大学Landbouw Hoogeschool te Wageningenの教授である。

ベーゼメルが民族学者であることは本稿の記述から想像がつくが，このことは『オランダ領東インド民族学簡約ハンドブック』B. Alkema and T. J. Bezemer eds., *Beknopt handboek der volkenkunde van Nederlandsch-Indië*, Haarlem, 1927, 583 pp.の共同編者であることにも表れている。（訳者未見）

ボルネオ一筋の民族学者だったわけではなく，ジャワのワヤンの研究者としても知られる〔Victoria M. Clara van Groenendaal, *Wayang Theatre in Indonesia: an Annotated Bibliography*, Foris, 1987: 34-35.〕。NACSIS（国立情報学研究所の目録所在情報サービス）を検索すると，ベーゼメル（Tammo Jacob Bezemer, 1869-1944）には『簡約ジャワ語文法』*Beknopte Javaansche grammatica*, 5 de verbeterde druk, Zwolle : W.E.J. Tjeenk Willink, 1931, 58 pp.『新旧ジャワ文学』*Proza en poëzie van Oud- en Nieuw-Java*, Deventer:

Van Hoeve, n.d. (1942), 96 pp.があり、ジャワの言語と文学に通じていたことがわかる。前者は少なくとも5版まで刊行されており、よく読まれたのであろう。さらに『マレー文学4世紀鳥瞰』 *Vier eeuwen Maleische literatuur in vogelvlucht*, Deventer: Van Hoeve, n.d. (1943), 98 pp.がある。(いずれも訳者未見)

ベーゼメルはまた守備範囲の広い人であったらしく『オランダ領東インド百科事典』全4巻にもとづく『オランダ領東インド簡約百科事典』 *Beknopte Encyclopaedie van Nederlandsch-Indië*, 's-Gravenhage / Leiden / Batavia, 1921, 632 pp.の編者でもある。この簡約版は序文によれば、本来の全4巻は価格が高いことと時に記述が詳細すぎるために幅広い読者層の需要に応えるものとは言い難いことから、多少とも東インド（インドネシア）に関心がある多くの人びとのために企画されたという。ちなみに項目「ダヤック人」は2頁に短縮されている。

付載の3項目のうち「ダヤック語」の著者は項目末尾にJ.C.G.J.と記され、ヨンケル (Johan Christoph Gerard Jonker, 1857～1919) と推定できる。ダヤック語の専門家ではないが、オランダ領東インドの諸言語に通じる言語学者で、1909年からレイデン大学のジャワ語ジャワ文学の教授の職にあった〔*ENI* V: 227-228〕。「プナン族」と「ダヤック人 (補遺)」は著者名が記されていない。

本稿第12節及びその他の項目における文献一覧は簡略に記されていて、書誌的事項が不完全である。雑誌論文については書誌情報を大幅に追加修正した。しかし、単行本についてはこの情報だけでもNACSISで容易に検索できるので、最低限の修正に留めた。原文は刊行年順の配列だが、ここでは著者名順に再配列した。

ダヤック人

目 次

ダヤック人

1. 名称の起源
2. 部族区分
3. 外見と性格
4. 衣服, 装身具, 刺青, 身体棄損, 武器
5. 住居, 家財
6. 部族の構成・行政・裁判
7. 土地権, 農業, その他の生業（以上前号）
8. 結婚と相続（以下本号）
9. 宗教, アニミズム等々
10. 日常生活の祝祭・葬式・埋葬
11. 言語と文学
12. 文献

ダヤック語

プナン族

ダヤック人（補遺）

8. 結婚と相続

ダヤック人は全般的に単婚が支配的である。しかしながらイスラム教徒の影響によって首長たちが1人以上の妻をもつこともある。これはある首長が影響力の大きい首長との家族関係を求めること, あるいは多数の家族を有したいという願望にも由来する。

ダヤック人には親等による禁止以外に結婚の禁止はない（自由婚）。同族結婚をウィルケンWilkenのように, 部族員以外との結婚に対する禁止は存在し

ないが、慣習的に同じ部族の者と結婚することと理解するならば、彼らを同族結婚の民族に数えることができる。首長とその子供の場合のみ、同じ身分の者と結婚できない時に、自由民のどの家族と結婚による関係をもつのか、関心がもたれることになる。自由民の男性は奴隷の女性と結婚できるが、これによって奴隷の義務を引き受けなければならない。離婚すると自由な立場に戻る。自由民の女性と奴隷の結婚はあまり多くない。

同部族の者との結婚を優先する慣習はダヤック人に非常に広くいきわたっている。同部族の者という概念を幾分広く取らねばならないようである。たとえばカヤン族がプニヒンPenihing族、ロングラット族等々と結婚することはめったにないが、同じ居住地に住まない同部族の者との結婚は多い。

同族結婚との関連で、血縁制度は父系である。ただし母系制あるいは母権が多少とも優越的であることを明示する特徴がたくさんある。たとえば婚姻の際に、少なくとも結婚後数年は、婿入りが行われるというのは、非常によく見られる慣習である。ランダックのマニユケ・ダヤック族で母系的性格がもっとも強く現れている。すなわち、女性側から結婚の申し込みをするのが通例であり、長女の場合は必ず女性側からである。長女つまりアナック・パンカラn anak pangkalanは両親の家に住み続け、結婚すると、家族の長になる。

婚資はたいいていのダヤック人に存在するが、買い入れ金としての意味は認められない、あるいはもはや認められなくなっている。というのも、女性と男性が同じ部族に属するので部族から買い取ることにならないのである。

こうした諸制度の結果、ダヤック人における女性の地位は非常に高い。女性是一般に男性と対等であり、事態の推移に大きな影響力をもつことも多い。

一般的に、結婚は財産の共有をもたらしさない。したがって合意の上での離婚の際、各々自分の財産を保持する。

離婚は男性からも女性からも、そして非常に多くなされる。子供がいたら、ムンダラム・カヤン族では、子供自身が父についていくか母についていくかを決めることができる。末っ子はふつう母親についていく。

結婚の申し込みはたいいてい男性の側からなされる。しかし娘の意志もしつ

かりと尊重される。児童婚はボルネオの多くの地域で見られる。ブル・ウ Blu-u川のカヤン族では、結婚可能な若者は両親あるいはその他の親族に6才くらいの娘との結婚について交渉させるのがもっとも一般的でさえある。この交渉が順調に進んだら、直ちに未来の義父母の家に住む。義父母への、また娘への小さいプレゼントが贈られる。義父母のために働き、そして娘が結婚可能になったら直ちに、なにも儀式をしないで、娘の配偶者になる。

他のたいていのダヤック人の諸部族でも、身分の高い者は別として、ささいな儀式だけで婚姻が結ばれる。食を共にし、シリーを共にする等々の象徴的な行為は、群島の他地方と同様、ダヤック人の諸部族でも見られる。

青年男女の交際は一般に非常に自由である一方、配偶者の忠実は男性にも女性にも求められ、慣習は姦通に厳罰（たいていは罰金である）を規定している。

相続法も男女の対等を示している。夫婦の間で相続がなされないことがあるが、娘は息子と同じ権利をもつ。分配の際には、息子たちは武器、ゴング等々を得、娘たちは衣服、家財等々を得る。ムンダラム川のカヤン族のように娘が多くを相続することがある。息子は自分で財を得るのが容易だからである。アナック・パンカランの母系結婚の場合（マニユケ・ダヤック族）、彼女は両親の財産の3分の2を得る。長男がそのカンブンに住み続けていると、残りを得るが、そこに住んでいなかったら、彼女が全部を得る。他の子供たちが得るものは、長女あるいは長男からの贈り物と考えられている。

9. 宗教、アニミズム等々

上ですでに述べたように、ダヤック人の一部はマレー人の影響によってイスラムに改宗しており、そのためマレー人に数えられるようになっている。これらダヤック人ムスリムにおけるイスラムの規定の知識と実践は、全般的に非常に低いレベルにあり、多くの面で異教徒の部族仲間とまったく区別できない。

ダヤック人の宗教は非常に多数の霊の崇拝にある。つぎのように区別でき

る。祖先の霊，なかでも強力な首長たちは徐々に半ば神になっていく。山，森，川，そして人格化された自然の力の霊。とくに最後のカテゴリーには，雷，嵐等々のような，神と見なしうる多くのものが含まれる。そして最後に高次の存在。これは部族によって名前が異なることがあり，あるものはアラビア語あるいはサンスクリット語が転訛したものであるが，だからといってこの観念自体がインドネシア固有ではないということにはならない。むしろ逆である。というのは，とりわけバハウ族やカヤン族において高次の存在がタメイ・ティンゲイTamei Tingeiつまり「我らが高い父祖」という純粋にダヤックの名前をもつ。たとえばオロン・マアニャン族では最高の神格をマハタッラMahatallaというが，これはアラビア語アラー・タアラAllah taalaの転訛である。オロ・ガシュ族ではマハタラMahataraというが，サンスクリット語のマハー・バタラMaha-bataraが結合したものである。海ダヤック族のプタラPetaraには，この同じバタラの名を認めることができる。しかしながら，だからといって異なる部族が関連ある名前で表現するものが同じものということにはならない。というのも海ダヤック族においてこの語は多義的であって，だれもがプタラをもつといわれる。

ニーウェンハイス博士のおかげで我々は，バハウ族における精神世界についての考え方に關して非常に詳細な情報をもっている。それらは多くの面で，他の諸部族にも見られることがらの典型として有効である。バハウ族の普通の人は自分の運不運を支配するトtoに主に関わっているが，より進歩した人たち，首長や司祭などはトをタメイ・ティンゲイの直接，間接の道具と見なししている。この良い霊は，妃のウニアン・トゥナンガンUniang Tenanganとともに全てを支配するものであって，ト以外にも，カヤン世界の母にして良い霊たちの支配者であるジャヤ・ヒプイJaya Hipuiなど，その他の神々を従えている。タメイ・ティンゲイは全てを知り，人間の運命を支配し，地上のすべてに賞罰を与える。

司祭だけでなく鍛冶屋，刺青師等々にも入り込む良い霊は，夢や動物という手段によってバハウ族にタメイ・ティンゲイの欲求や心積りを伝え，そし

てこのことを通して彼らにしなければならないこと、させなければならないことを知らせる。彼らに予言と予兆の非常に複雑な体系が発達したのはこれゆえである。その際、とくにある種の鳥の飛翔が重要な役割をもっている。

群島に一般的に見られるプマリpemaliのシステム、つまり禁止規定の体系はバハウ族だけでなく、すべてのダヤック人に非常に広範に存在し、生活全体を束縛している。この束縛は経済的な必要に勝る拘束力をもつことさえある。こうした禁止規定を遵守することであらゆる悪影響から保護されると考えられている。中央ボルネオの共通語であるブサンBusang語ではこうした禁止規定をプマリといい、宗教的な意味で禁止されていることがらをラリlaliという（たとえば名詞として用いられる）。

ダヤック人は、司祭ないし女性司祭の仲介によって神々の世界や霊の世界と関係をもとうとする。バハウ族では司祭ないし女性司祭（女性司祭の方が多い）をダユンという。人が出あうあらゆる不幸や病気の際、死亡や悪夢の際に彼らの助力が求められ、彼らはまた農業の祭りの機会や、霊に供犠するすべての機会に重要な役割をになう。ダユンの身分として認められる前に、見習い期間がある。ダユンはシャーマンと考えることができる。というのも彼らは仕事の前に良い霊に入り込んでもらわねばならない。しかしバハウ族のダユンの場合、恍惚状態はめったに示さない。彼らは住民から高く尊敬され、道徳的に非の打ちどころのない生活をしている。これとまったく違った位置づけなのがバリト川のダヤック人の司祭（バシルbasir）と女性司祭（バリアンbalian）である。とくに下流地域では女性シャーマンは同時に売春婦であり、男性シャーマンは異常な背徳にふけっている。同じことが、海ダヤック族における男性シャーマン、マナン・バリmanang baliにもあてはまる。ドゥスン・ダヤック族（サラワケ）は男女ともにシャーマンをバリアンbalianないしワディアンwadianという。彼らは薬剤師であるとか、死者の祭りの際に登場するとか等々によって、付加的な名前で区別される。このダヤック人でもオロン・マアニャン族でもバリアンたちは、カハヤン川のバシルやバリアンのように不道徳で有名ということはない。

ダヤック人におけるシャーマンの主要な仕事のひとつが病気治療である。海ダヤック族のマナンの場合はほとんど唯一の仕事である。ダヤック人においても、病気というものは人に帰属する諸霊（いわゆる「個人の諸霊」）のうちのひとつの不在のせいであるというアニミスティックな考え方が支配しているので、病気治療はこの霊をあらゆる手段や御祓によってもとに戻らせることにあり、いくつかの部族では霊を霊の国に導くことにある（下記参照）。

像を媒体として祖先を崇拝したり祖先によびかけたりすることはダヤック人にはほとんど見られない。宗教との関係で像のある部族がいくつかあるが、それらは神と見なされる人間、動物、物体の像であり、こうした像の霊であるガナganaがこれらの神々の財産となるようにというものである。あるいは病気の際に、患者の身代わりとされるはずのものである。あるいはまた、北ボルネオのクニャ族の場合のように、これらは家を保護する神々の像である。像は怒れる霊を退散させるのに役立つことがあり、これらの像にはたいい大きな生殖器がついている。この生殖器が霊を追い払うからである。

ダヤック人の宗教システムの中で特別な位置を占めているものに狩られた首の崇拝がある。あらゆる機会に、とりわけ死亡した首長の喪があける際には、狩ったばかりの首が必要とされる。ヨーロッパ行政の介入によって首狩りが停止されたところや、ムンダラム川のカヤン・ダヤック族のようにそれが廃れてしまったところでは、その儀式は他の部族から借りた古い首で行う。元来ダヤック人において首狩りの原因の一つが自分の生命力（ないし「靈魂」）を首を狩られた者のそれで強化したいという願望であったとしても、現在いくつかの部族においては、その首には友好関係をもたなければならない霊が宿っているという考え方になっている。

植物、動物そして無生物に霊が宿するという考え方（つまりより限定された意味でのアニミズム）は、群島の他のアニミスティックな諸民族に見られるものから原則的に外れていない。死後の生活に関する観念についても同様である。ダヤック人もあの世の生活をこの世の生活の延長とイメージしている。したがってここで尊敬されるものは、あそこでも他の人より高い地位につく。

霊の国の位置を彼らは地上の一番高いところ、雲天にあると考えている。霊がそこに行くには無数の障害がある。とくに諸部族で言われているのは、たとえばカヤン族の言い方だと、振るわれる筈のように揺れ動く木の幹を通して川を渡り、あるいはまた剣のように鋭い道などである。オロ・ガジュ族では霊は火の滝を渡らねばならない。葬送儀礼はこうしたイメージと密接不可分に関係するので、これらについて下でもう一度ふれる。

ダヤック人の庶物崇拜の中でいわゆるトゥンパヤンtempayanないしブランガbelangaについてとくに取り上げるべきである。釉薬をかけた大きい壺ないし瓶であるが、ダヤック人は超自然力を認めている。トゥンパヤンには多くの種類があり、ダヤック人は本物には途方もない値段を払うことがある。ブルネイのスルタンの所有するひとつに、2万4千ギルダーで申込があつたが、スルタンは手放さなかつた。それらは招福除災の力があると考えられている。本物のトゥンパヤンの破片でさえ高い価値があるとされ、その中にあつた水には治癒力があるとされる。

10. 日常生活の祝祭・葬式・埋葬

人生の特定の時期や特別の機会に祝うさまざまな祭事は、ダヤック人において、すべて宗教的性格を有し、したがって司祭あるいは女性司祭がその際に中心的な役割をになう。これら祝祭はつねに神々あるいは諸霊への供犠をとめない、たいいてい共食が行われる。主要なものは命名、家の新築、結婚、農耕の始まり、そして収穫の際に行われる。収穫の祭りはムンダラム川のカヤン族では同時に新年の祭りであり、収穫を取り入れたら、豊饒があまねくいきわたるようにと祝う。ムンダラム川のカヤン族は毎年豊作を期待できるので、この祭りを毎年祝うが、マハカム川ではしばしば不作が起こるので、2、3年に1度である。

稲作に関連のある祝祭は、霊の好意を得るためだけでなく、稲魂を惹きつけるため、あるいは留まらせるために行う。このことはとくに仮面劇から明らかである。それはマハカム川のカヤン族では播種の時に行われ、仮面をつ

けた者は霊を代表し、人間より強力であって、ブルワ・パレイ *bruwa parei* つまり稲魂が遠くで迷ってしまったら連れ戻さねばならない。播種期のさまざまな時期に多数の禁止のきまりがあり、これらのきまりは播種にともなうて行われる祝祭に宗教的性質のあることを示している。この祝祭のハイライトは司祭たちないし女性司祭たちの踊りである。目を引くことは、ムンダラム川のカヤン族では成人男性が播種の時期、ふだんは子供の遊びでしかない独楽まわしをすることである。

南東州のダヤック諸部族では主要な祝祭は遺体の世話に関わるものである。それゆえここではまず主要な部族の葬送の慣習を取り上げねばならない。

ダヤック諸部族の多くで元来遺体を焼くことが広く行われていたように思われる。現在この慣習が残っているのは、サラワクでは陸ダヤック族、南東州ではオロン・マアニャン族、そしてシディン *Sidin* (サンバス *Sambas* の東部) のダヤック人などの少数にすぎない。ずっと一般的なのは、死亡すると直ちに仮の柩に遺体を安置する習慣である。この柩は多くの場合、幹を繰り抜いて作る。この仮の柩はふつう非常に狭い。広いと死者が仲間をほしがって、家族の誰かが死ぬことになるのを恐れるからである。いくつかの部族では単に遺体を森の中の保存所に置くだけで、分解するまで放置する。かつてウルン・マアニャン族では身分の高い者の遺体はミイラにされた。いくつかのドゥスン部族 (イギリス領北ボルネオの) では遺体を竜腦詰めにして保存することが報告されている。

バハウ族では柩を埋めないで、特定の場所、たいていは岩陰に安置する。

霊の国 (上述) での霊の生活についての考え方に関連して、ダヤック人に非常に一般的な慣習として、あらゆる品物を柩に添える。こうした品物の霊が死者と行を共にするのである。現在バハウ諸部族ではもはやこれ以上の遺体の処置は行われないが、かつて上マハカムでは、軟らかい部分がなくなってしまった後の骨を洗って壺に納め、それが洞穴に安置された。したがっておそらくこれらの部族でもかつては、南東州で現在も行われているような、大規模な死者の祭りが行われたであろう。その目的は、暫定的にまだ墓に、

少なくとも地上に滞在する霊を永久に霊の国に送ることである。南東州ではこの祭りに例外的に多くの仕事が費やされる。オロ・ガジュ族ではそれはティワtiwahといい、7日間続くこともある。その準備が大変なために、死者のためのティワの祭りを祝うことができるまでに、非常に長い時間がかかることがある。それゆえにしばしば複数の霊のティワが同時に行われる。女性司祭あるいはシャーマンたちのこの祭りにおける仕事は、霊を霊の国に送り出すことである。これは本来的にはトゥンボン・トゥロンTempon-Telonつまりダヤック人のカロンCharon〔ギリシア神話の地獄の川の渡守〕が行うのだが、司祭ないし女性司祭が呪文の歌によってこれに働きかけることによって行われる。長い連祷の中で、あの世へと旅立つ霊の経歴が述べられる。この祭りの際に多数の牛が犠牲に供され、その肉が参加者にふるまわれ（牛の霊は死者の霊に同行する）、またトゥワックがふんだんにふるまわれる。そのためこの祭りは盛大な酒盛りとなりはて、甚だしい狼藉が行われる。

かつて、死者に対する喪があげるこの最終的な遺体処理の際に、南東州だけでなく他の地域でも、とくに首長の場合には、奴隷あるいは債務の担保になっている人が犠牲に供された。政庁がまだ十分な影響力を発揮できないところではまだこれが行われている。その意図するところは、死者の霊にこうした犠牲者の霊を召使として霊の国へお供させることにある。

パジュ・ウンパットのオロン・マアニャン族においても、シワSiwaという死者の祭りが行われ、かつては奴隷が1人犠牲に供された。1ヵ月前に仮の柩がながきならとともに焼かれる。この儀礼の際には10日間の祭りイジャンベijambéが行われる。しかし頭蓋骨や骨は完全には焼けない。半ば冷めた遺骨が4本の柱の屋根の下に安置され、そこにはプラフperahu〔船〕の形をした柩が置かれている。日用品やその他の死者の所有物が別の箱に納められる。この種の霊廟は他のダヤック人にも見られ、そこに遺品が最終的にもたらされる。クニャ族では、とくに首長やその一族には非常に高くて立派な作りの、屋根つきの保存所があり、そこに様々な品物がぶらさげられる。死者の祭りを行う諸部族では、その機会に遺体がこの恒久的墓所に移される。オロ・ガジュ

族ではこれをサンドン sandong といい、カヤン族ではサロン salong という。

11. 言語と文学 項目「ダヤック語DAJAKSCH」を見よ。

12. 文献

Bock, C., *Reis in Oost - en Zuid - Boeneo*, 1887.

Bosman, C. H., *Pandecten van het Adatrecht: Het beschikkingsrecht over grond en water*, 1914.

Engelhard, H. E. D., “De afdeeling Doesoenlanden”, *Bijdragen tot de Taal-, Land- en Volkenkunde*, 52 (1901): 179-.

Enthoven, J. J. K., *Bijdragen tot de geographie van Borneo's Wester-Afdeeling*, 2 vols., 1903.

Furness, W. H., *The home life of Borneo head-hunters*, 1909.

Grabowsky, F., “Der Häuserbau, Die Dörfer und ihre Befestigungen bei den Dajaken”, *Globus*, 92 (1907): 69-.

Hose, C. and W. McDougall, *The pagan tribes of Borneo*, 2 vols., 1912.

Kühr, E. L. M., “Schetsen uit Borneo's Wester-Afdeeling”, *Bijdragen tot de Taal-, Land- en Volkenkunde*, 46 (1896): 63-88, 214-239; 47 (1897): 57-82.

Ling Roth, H., *The natives of Sarawak and British North Borneo*, 2 vols., 1896.

Nieuwenhuis, A. W., *Quer durch Borneo*, 2 vols., 1904.

Perelaer, M. T. H., *Ethnographische beschrijving der Dajaks*, 1870.

Schadee, M. C., “Het familieleven en familierecht der Dajaks van Landak en Tajan”, *Bijdragen tot de Taal-, Land- en Volkenkunde*, 63 (1910): 390-486.

Schwaner, C. A. L. M., *Borneo*, 2 vols., 1853-54.

Sundermann, H., “Religiöse Anschauungen und Gebräuche der heidnischen Dajakken auf Borneo”, *Algern. Missions-Zeitschrift*, 35 er Jahrg. (1908): 383-, 409-.

Veth, P. J., *Borneo's Wester-Afdeeling*, 2 vols., 1854-56.

- Wechel, P. te, "Erinnerungen aus den Ost-und West-Dusun-Länden (Borneo)", *Internat. Archiv. Fur Ethnogr.*, 22 (1915): 1-24, 43-58, 93-128.
- Westenenk, L. C., "De Moealang en Sekàdan-Dajaks", *Tijdschrift voor Indische Taal-, Land- en Volkenkunde*, 39 (1897): 305-326.
- Wilken, G. A., *Handleiding voor de vergelijkende volkenkunde van Nederlandsch-Indië*, 1893.
- Wilken, G. A., *Verspreide Geschriften*, 1912.
- Willigen, P. C. van der, "Mededeelingen omtrent een reis door Borneo, van Pontianak naar Bandjarmasin, langs Melawan en Kehajan in 1894". *Tijdschrift van het Nederlandsch Aardrijkskundig Genootschap*, 2e Serie, 15 (1898): 365-443.
- [以上]

ダヤック語

ボルネオに居住し、マレー人その他の入植者との対比においてこの島の本来的な住民と考えることのできる人々である諸部族の諸言語は、全般的に知見が非常に少ないので、相互関係をまだ確定しえない。したがって暫定的にであるが、これらの言語と方言の全部を「ダヤック語」という総称で括ることに異論はない。オランダ領ボルネオでしゃべられているうちもっともよく知られているのは南東州のガジュ・ダヤック族の言語である。プルプタック Pulupectak, マンカティップ Mangkatip, マンタンガイ Mantangai, カプアス Kapuas, カハイアン Kahaian の諸部族で若干の方言的差異をともなって用いられ、シホン Sihong 族とパタイ Patai 族でも多少の差異が見られる。この言語は接頭辞と二重接頭辞がかなり豊富であるが、接尾辞は an (a のこともある) と n だけであり、まためったに用いられない。接中辞はもはや実際には存在しない。この言語は、いくつかの観点から、ジャワやスマトラの諸言語とスラウェシ（より限定的には北スラウェシ等々）の諸言語の中間に位置すると言うことができよう。時の違いは動詞における接辞によって表現される。接

続法あるいは願望法はとくに表現されず、あるいは同じく接辞によってのみ明らかにされる。語幹形が命令法の役割をする。動詞の活用形は存在しない。受け身形は接頭辞 *i* でつくる。その際、語幹の頭子音の場所に現れる鼻音が消滅しないという特徴がある。たとえば語幹 *takau* の *manakau* 「盗む」は *inakau* 「盗まれる」となる。しかしながら、*i* が除かれることが珍しくなく、したがって、たとえば *inakau* と並んで *nakau* ということもできる。また基語が受け身形になりうることもある。たとえば *maharak* 「追い払う」と並んで、*harak* = *iharak* 「追い払われる」となる。マレー・ポリネシア諸語の一般法則に従って、修飾語は被修飾語の後ろに位置する。被修飾語が母音で終わる時は、若干の例外はあるが、*n* が付加される。たとえば *kayu-n jihi-n huma-n ama-ku* 「私の父の家の柱の材木」。特定の場合には、3 人称の代名詞の所有形によっても所有格関係を示すことができる。また *ai* によってこれを強調して示すことができる。たとえば *huma-n apa-ngaku* 「私の父の家」の代わりに *huma ai-n apa-ngaku*。この *ai* は (*ayu* と並んで) 人称代名詞の所有格として使うこともできる。人称代名詞では双数、さらに三数さえ見られるという特徴がある。

ガジュ語は口語しかないので、当然ながら本来の文学をもたない。ただし人々の間に物語、教訓、等々が語り継がれている。バンジャル語、ジャワ語、そしてとくにマレー語がガジュ語に影響を与えないはずはなかったのである。さらにはガジュ語には特有のディンダン *dindang* (マレー語のパントウン) が蓄積されている。死者の祭りなど宗教的な儀礼の際や誓約の際に、司祭ないし女性司祭がある種の歌を歌う。それは「バサ・サンギアン *basa sangiang*」つまり神または霊の言語という名前の詩語で構成されている。しかしながら、動物寓話などのその他の歌でもできるだけこのバサ・サンギアンが用いられる。バサ・サンギアンも示す諸特徴をとまなう、こうした詩語の存在は非常に一般的である。

オロン・マアニャン族の言語についても幾分か詳細が知られている。この部族は主にバリト川の右岸、ブントウックから南緯 2 度と 3 度までに住んでいる。その言語はガジュ語とは著しく異なるというのはものの、全体的には同

じタイプである。つまり接頭辞が多く、接尾辞は本来anとenだけである（ただしガジュ語の場合よりはるかによく使われるようである）。接中辞にm（マレー・ポリネシア諸語のumにあたる）がまだ存在するが、めったに使われない。所有格を作る際に、被修飾語が母音で終わる時にnが付加されない。たとえばlewu olon「人間の家」。ここでも所有格を別様に言うことができる=lewu wat olon。人称代名詞では双数や三数は見られないようである。特徴的なのは、接頭辞naで受け身を作ることである（接頭辞iはここでは全く異なる機能を有する）。たとえばmukul「打つ」とnapukul「打たれる」。

ブサンBusang語は、主に西州の上カプアスおよび南東州の上マハカム分県にいくつものダヤック部族の言語である。のみならず、多くの部族が共通語としてこの言語を解する。予想に反してこの言語はかなり退化しているようである。このことは第一に語形についていえる（単語リストから判断するに、この現象はプニヒンPenihing語、ロン・グラットLong-Gelat語等々のような、その周辺の諸言語においてさらに著しいはずである）。ガジュ・ダヤック語とはまったく異なる。文法的にもまったく異なり、接尾辞は生きた現象としてはまったく消滅している。若干の単語がかつてそれが存在した証拠を提供しているだけである。接頭辞も若干が見られるだけで、接中辞em（=um）についても生きた現象かどうか明らかでない。動詞の本来の受け身形は見られない。これに対して動詞の語形変化が見られる。ただしその構成は非常に退化している。人称代名詞において、今や崩れた形だが、双数が見られるようであり、またかつて三数が用いられていたことが複数形から証明される。所有格構成におけるnの痕跡は、母音で終わる単語の場合に、少なくとも複合の場合に見られる。たとえばmata-n do「太陽」。

ティドゥンTidung語（タラカンTarakan語）およびブルンガンBulungan語について、まだごくわずかだが、多少はわかっている。ブルンガン語は、単語リストによれば、マレー語の影響を非常につよく受けているようであり、またベーフBeechのリストによれば、ティドゥン語（タラカン語）も同様であるが、その程度はブルンガン語ほどではない。しかしながら、そこに上がつ

ていることがらは、他の情報と一致しないことが多い。たとえばデン・ハーメルDen Hamerはティドゥン語の、接中辞umをとまう多くの語形を示しているが、これはベーフにはまったく示されていない。

オランダ領地域のその他の諸言語については、せいぜい単語リストによって知りうるだけである。

文献

- Barth, J. P. J., *Boesangsch - Nederlandsch Woordenboek*, 1910.
- Beech, M. W. H., *The Tidong Dialects of Borneo*, 1908.
- Genderen Stort, P. van, *Nederlandsch - Kenja Dajaksche Woordenlijst*, 1912 (Verhandelingen van het Bataviaasch Genootschap, 59-3).
- Hardeland, A., *Versuch einer Grammatik der Dajackschen Sprache*, 1858.
- Hardeland, A., *Dajack - Deutsches Wörterbuch*, 1859.
- Ray, S. H., "The Language of Borneo", *The Sarawak Museum Journal*, 1-4 (1913): 1-196.
- Sundermann, H., "Dajakkische Fabeln und Erzählungen", *Bijdragen tot de Taal-, Land- en Volkenkunde*, 66 (1912): 169-.
- Sundermann, H., "Der Dialect der Olon Maanjan (Dajak) in Süd-Ost-Borneo", *Bijdragen tot de Taal-, Land- en Volkenkunde*, 67 (1913): 203-.
- 〔以上〕

ブナン族

定着生活に移行したダヤック人の他に、ボルネオのほとんどの地域において、大河川の源流域の進入しがたい原生林の中に、放浪する狩猟諸部族の小集団が見られる。これらの大部分はまだ固定した居所をもたず、枝や葉でつくった仮の宿所で夜を過ごしたり雨を避けたりするだけである。これら放浪部族は様々な名前で知られている。マハカム川やカプアス川また南に流れる河川の源流域のウキットUkit族、サラワクの諸河川やカプアス川の源流域のブ

クタンBeketan族ないしブキタンBukitan族、ブルンガンやサンバリウンSambaliungのバサップ族、等々。これらの集団でもっとも有名でもっとも人数が多いのはプナン族であり、そして先述の諸集団は、単一の部族が、地方的な差異によって、また他部族との交流や混血が多いことによって分化した下位部分であるというのはいえなことはない。したがってプナン族について言われることがらは、程度の差はあれ、他のすべての集団にもあてはまる。

プナン族プロパーは中央ボルネオの高地を放浪している。彼らは低地にも来るし、海岸に至ることもある。『慣習法集成Adatrechtbundels』第13巻所載のボルネオの民族地図Volkenkaart van Borneo³⁾によれば、プナン族が見られるのは源流域およびマハカム川の上流の左岸であり、ここではカヤン族やバハウ族の下で暮らしている。サンバリウンの南では彼らはもっと低地域に近づいていて、カライKalai川中流域の右岸にいる。西州ではムラウィ川とバリト川の源流域、ウル・アヤルまたはオト・ダヌム・ダヤック族の地域にいる。さらにサラワクではルジャン川の源流域とバラム川の中流にいる。彼らの居住地は、放浪的な生活様式との関連で、はっきりと境界が定められていないとはいえ、各グループがやはりある程度きまった獵場をもつようである。このことは、彼らがまわりを取り巻く定着的なダヤック部族の首長を自分の支配者と考えていること、および、ふつう特定地域の住民と友好関係にあることとも関連している。彼らは肉体的にはボルネオのもっとも立派な人々である。けっして陽光にさらされることがないので、まわりの部族ほど黒くなく、光沢のある肌をしている。刺青が行われる。ニューエンハイス博士は刺青の方法によってバハウ族とクニャ族のグループに区分した（Nieuwenhuis, *Quer durch Borneo*, I. p.451）。プナン族の性格は平和的と記述されている。彼らはふつう首狩りをしないし、彼らが戦いに臨むのは一般的に、血の復讐をするために他部族の者を追跡するときだけである。それは、プナン族の者に暴行した他部族の者を放免しておくことはできないからである。しかしながら、殺人者の村落や部族に対する復讐はしない。くわえて、彼らはいへんに恥ずかしがりやである。主な衣服は、男性は樹皮布の褌、女性は腰布で

ある。武器は剣と吹き矢である。吹き矢には幅広の槍先および毒をつけた矢を入れる筒がついている。1 集団のプナン族はふつう 20 ないし 30 人の成人と同じくらいの子供からなる。年長の男性たちの 1 人が首長ないし指導者として認められている。集団の大部分が首長の近親者である。ふつう妻は他の集団から受け入れる。一夫多妻は見られず、一妻多夫が見られることがある。結婚の儀式は非常に簡単である。結婚の後、夫は妻の集団に受け入れられ、ふつうそこに留まる⁴⁾。集団内では共產主義が支配しており、寛容と互助の度合いは非常に高い。プナン族は農業を行わない。この点での例外は非常に少ない。主要な生業は吹き矢、罨、落とし穴等々による狩猟、そして森の様々な恵みの採集である。これら森林産物の多くは他部族と交換される。彼らの竜腦採集の能力の高さは他部族の間で有名である。娯楽は歌であり、単純な踊りである。歌には竹の音楽をとまなうことがあり、その竹は中程より先が 6 つに裂けている。宗教的な観念はカヤン族と大筋で同じであるが、より素朴である。彼らは鰐の像しか作らず、それは宗教儀礼でも役割を担う。動物を供犠することはない。誰かが死ぬと宿营地を変え、死者は、住居とした粗末な屋根掛けの下にながしかの枝葉で覆うだけで置いていく。

プナン族のダユンつまり司祭たちは「靈魂」をよび戻したり、病氣や怪我を治したりする術にたけているので、まわりの部族から需要がある。

文明の段階が低いにもかかわらず、プナン族に十分な理解力が欠如しているとはけっして思えない。道徳的にも周囲の定着部族よりけっして低くない。彼らのある者はすでにまわりの部族から農業を取り入れ、家屋に住む。しかしその家屋はまだ非常に粗末である。

文献

Hose, C. and W. McDougall, *The pagan tribes of Borneo*, 2 vols., 1912.

Nieuwenhuis, A. W., *Quer durch Borneo*, 2 vols., 1904.

〔以上〕

ダヤック人（補遺）

項目「ダヤック人」への補足として、まず最初にオロ・ガジュOloh Ngaju族とオト・ダヌム族についていくつかの事柄を述べる。後者の言語にはダヤックという語は存在しない。オロ・ガジュには重複形ダヤ・ダヤックdaya-dayakがあり、それは背の高い人の進み方ないし歩き方との対比における、背の低い人また太った人のそれ、または比較的低い人々の一群ないし中位の大きさの動物の一群がつぎつぎに進むことを特徴づける語である。重複させないダヤックdayakの語はある特定の種類の稲の名前である。したがって、民族ないし部族の名前としてのダヤックの起原がオト・ダヌム族にないことは確実であり、オロ・ガジュ族にないこともほぼ確かである。しかしながら彼らは、キリスト教に改宗した場合、その後はダヤックと自称している。

カプアス川とカハヤン川の下流域と中流域に住む人々は古くから、またおそらく最初は、沿岸の住民つまりバンジャル人との対比で、自らをオロ・ガジュつまり上流の人と称した。バンジャル人は彼らをピアジュBiajuともよんだが、ガジュの人々はこうよばれるのを好まない。そこに軽蔑が含まれていると思っているのである。ちなみに、コタワリンギンKotawaringinでは、ダヤック人はママーMamahと自称し、マレー人はオラン・バニアガOrang baniagaつまり商いの輩と自称している。ガジュ族は沿岸の住民をオロ・トゥンバンOloh tumbangつまり河口の輩とよんでいる。ピアジュ族は、マントビMantobi川沿いの下位部族以外には、コタワリンギンには見られない。カプアス川とカハヤン川の上流のオト・ダヌム族はガジュ族をウルン・バアットUlun baatつまり下流の人とよび、自身をウウット・ダヌムUut danum（マレー語のウル・アイルulu airに相当する）と称し、そしてガジュ族はこれら上流の人々を、その他の内陸の諸部族と同じく単にオトOtとよぶ。しかしながら、オト・ダヌム族は自らを他の内陸の諸部族からはっきりと区別している。たとえばウウット・ハラスUut harasつまり原生林の人々は、オト・ダヌム族にとってはとくにプナン族のことを指すし、またその他たとえばウウット・ハブカットUut Habukat（ブカット族）、ウウット・マンダU. Manda、ウウット・パニヤ

ウンU. Panyawung, ウウット・ムルンU. Murung, ウウット・パリU. Pari, ウウット・マハカムU. Mahakam等々の内陸の諸部族である。

オト・ダヌム族の人口はおそらく1万を数え、シュワーネル山脈の南北、カティンガン川とその支流、マンタヤMantaya（カランKalang）川などこの山脈に発する河川の上流部や、ミリMiriを含むカハヤン川沿い、カプアス川上流沿い、そしてラカアットLakaat川やギランGilang川等々の支流を含むムラウィMelawi（マラフイMalahui）川沿いに住む。彼らはダヌム地域でもっとも東の大河ムルンMurung川沿いではより一層散在している。

ガジュ族とオト・ダヌム族は食人種だったという非難をとんでもないことと否定する。道徳的には、ガジュ族の女性司祭が同時に売春婦であるがダヌム族ではそうでないという限りで、オト・ダヌム族がガジュ族より高いように思われる。オト・ダヌム族では身分があり尊敬される女性も、また族長たちの妻も女性司祭をつとめる。またダヌム族の司祭たちは、オロ・ガジュ族の司祭の悪評の原因となった行為を犯すことがない。まだ異教徒であるオト・ダヌム族の宗教行為はガジュ族よりも単純で、本来の形を保っている。

刺青は両部族とも以前よりはるかに少なくなっている。オト・ダヌム族では若者たちはせいぜいふくらはぎに描かせるだけで、彼ら自身衣服のようなものだというが、今でもやはり勇気のしるしであることは確かである。ふんだんに刺青している人はやはり勇敢とされるのだから。かつてとくにオト・ダヌム族で各種の刺青がたくさん見られた。

これら上流の人々の武器では、ダヌム族ではアフパンahpangとよばれるマンダウmandau〔剣〕と並んで、ドホンdohongをあげるべきである。これは両刃の短剣または長めの短剣であり、象牙の柄をもつことが多い。こうした武器は古い家宝であって大事に保存されている。

家や村を囲む木柵は両部族ともすでに消滅している。首狩り来襲をおそれる必要がなくなって以来、こうした囲いはなくてよいのである。大家屋もなくなりつつあり、ますます使われなくなっている。一層の交通と教育によって、キリスト教への改宗によって知られるようになった新しい考え方が、1な

いし2家族の家屋の必要を生み出した。部族員とともにひとつ屋根の下に住んだ、古い、影響力のある族長たちも徐々に死に絶えていく。かくして現在では多くの者が小さい家に家族と一緒に住み、その家には果樹を植えた庭がついている。

オト・ダヌム族は自分たちの高位の存在をパハタラPahataraとよぶ。彼らがこれについて述べることは、ガジュ族が自らのマハタラMahataraについて述べることと大きく異なっている。言うところによると、パハタラはダヌム族の7人の祖先を、天上から黄金の供物台パラカイpalakaiに降ろし、特定の山々に場所を与えた。パハタラは天国に、天地のまわりに、そして雲の中にも住む。それは陸と水と天空を作り、それから人間、多数の星、月、そして動物たちを作った。パハタラは眠らない、すべてを知り、罰することができる。この上位の神の他に、オト・ダヌム族には水の精、空気の精、森の精等々がいる。しかし彼らはパハタラとジャタJataたちやサンヤンSangyangとの関係についてはっきり知らない。

第1巻でのべたダヤック諸部族の他に、ティンガランTinggalanの部族について述べねばならない。それはティドン地域の北部、スンバクンSembakung川の中流と上流、スブクSebuku川の上流域に住む。人口は約11,000と推定され、100軒の大家屋に住んでいる。この部族は独自の言語をもつ。

ティンガラン族は背が低く、色はかなり黒い。刺青は知らない。ダヤック人には一般的なその他の身体欠損も彼らには見られない。男女とも両方の耳朶に小さい穴をあけて耳飾りをする。耳飾りには色鮮やかな花がよく用いられる。男性は頭髮を銅製または木製の棒に巻きつける。女性は束ねずに垂らしているか、巻いて髷にする。若者は紐を通したビーズの首飾りで身を飾る。娘たちがこうした装身具をつけることは同時に、若者と親密になるのを厭わないことを示すものである。

家は川と並行に建てる。高さ2～3メートルの杭の上に建て、縦に3分し、中央は幅約3メートルの通路であり、両側が室に区切られる。家屋の中央に

は室はなく、通路はここでは建物の幅一杯を使った空間となり、これをサラッ sala'「広間」といい、集会や祭りの場であり、また客間としても使われる。家屋の長の室はふつうサラッの横にある。室と室の仕切りは非常に粗末である。

ティンガラン族の主食はキャッサバである。彼らは定住部族ではあるが、稲作は意味をもたず、他のダヤック人が大事にする稲作に関わる特別な慣習も知られていない。彼らも多少の稲を栽培するが、それは外来の客をもてなすため、および旅行の際の簡便な携行食とするために限られている。

婚姻関係と性道德についての彼らの考え方に基づいて判断するに、ティンガラン族は堕落している印象を与える。一種の条件つき結婚がある。娘の両親が希望する婚資の一部を〔婿側が〕支払うことから生じるのだが、より高い価格を払う者が現れると、娘の両親はこの結婚を解消して、娘は新たな条件つき結婚を始めるのである。こうした契約より前に、娘たちは男性と親しい関係をもち、その男性の夜間の訪問がよるこんで許される。それはしばしば子供の時からで、報告されているところによれば、娘たちはわざと身体的に適するようにされるといふ。娘たちもこうした夜間の訪問を誇りとするという。こうした事情にもかかわらず、子供が生まれると夫婦の関係は強く安定的になる。

これらダヤック人は、死者を瓶、いわゆるマルタバンに入れて葬送する。マルタバンはまず二分する。遺体は硬直する前に、マルタバンに納まるように膝を高くした座位にする。マルタバンをひとつに合わせてロタンの紐できつく縛り、割れ目は樹脂でふさぐ。マルタバンの口は木製の蓋をする。こうした処置をするまえに遺体が硬直してしまっていたら、通常のやり方に従うために四肢を切断する。宗教に関しては、ティンガラン族はマングン Mangun という名でよぶ高位の存在をもっていると報告されている。

プナン族にはまたバサップ族が含まれる。バサップ族は、おそらく 100 人に満たない、非常に小規模な部族で、タンジュンセロル Tanjungsélor とタナクニン Tanahkuning の間の地域、主にはサジャウ Sajau 地区で移動生活をしている。彼らの小屋は非常に粗末である。ピサン pisang〔バナナ〕とキャッサバを

ダヤック人（下）

育てるが、この労働は定着生活への一定の傾向を示すのかもしれない。クタイのサンクリランSangkuliranの上流部にもバサップ族が住むらしい情報がある。

〔以上〕

注

- 3）（訳注） 巻頭（目次の後、本文の前）の地図は大判（32×27センチ）の多色刷りなので、ここに転載するのに適さないのが残念である。
- 4）（訳注） 妻が夫の集団に入るのか逆なのか記述が矛盾している。